

令和3年度 千葉県立中央博物館自然誌シンポジウム 「バラの育種最前線！」

プログラム

13:00～13:05 館長あいさつ

13:05～13:45 大場 秀章 氏（東京大学名誉教授）

演題：バラの園芸化と19世紀以前のバラの育種

13:50～14:30 上田 善弘 氏（岐阜県立国際園芸アカデミー 前学長）

演題：20世紀以降のバラの育種

（休憩 第1ホールで全員で記念写真撮影）

14:40～16:00 パネルディスカッション

演題：これからのバラの育種

育種家／武内俊介氏・河合伸志氏・小山内健氏・木村卓功氏

司会／御巫由紀（千葉県立中央博物館）

16:00 閉会

ご希望の方は閉館まで、特別展「バラのすべて」をご覧ください。

16:30 終了／閉館

<講師紹介>

大場 秀章（おおば ひであき）氏

東京大学名誉教授。専門は植物分類学、東京大学総合博物館教授としてヒマラヤや乾燥地帯でのフィールド研究を進めてきた一方で、植物学史や植物画など植物文化にも造詣が深い。バラについての論文・著書も多く、『バラの誕生』（中央公論社）、『オールド・ローズ・ブック：バラの美術館』（八坂書房）等はバラ愛好家必読の書となっている。

上田 善弘（うえだ よしひろ）氏

千葉大学園芸学部助教授を経て、岐阜県立国際園芸アカデミー学長。学長退任後は、同客員教授、ぎふワールド・ローズガーデン（旧称：花フェスタ記念公園）理事。専門は花卉園芸学で30年以上にわたりバラの遺伝、育種に関する研究を続けてきた。NPO 法人バラ文化研究所理事、ぎふ国際ローズコンテスト審査委員長、国営越後丘陵公園「国際香りのばら新品種コンクール」審査委員長などを務める。著書に「バラ大図鑑」（共編著、NHK 出版）、園芸「コツ」の科学（講談社）等。

武内 俊介（たけうち しゅんすけ）氏

京成バラ園芸株式会社で鈴木省三氏、平林浩氏に続く3代目の育種家。代表品種は‘しのぶれど’（2006年）、‘夢香’（2007年）、‘薫乃’（2008年）、‘快拳’（2011年、ローマ国際コンクール金賞）、ほのか（2004年、リヨン国際バラコンクール「グランドローズオブザセンチュリー」受賞）、恋結び（2017年、モナコ国際バラコンクール「クー・ド・クール賞（心の賞）」受賞）、桜衣（2019年、バーデンバーデン国際コンクール銅賞、ルロー国際バラコンクール入賞、ニヨン国際バラコンクール入賞）等。

河合 伸志（かわい たかし）氏

各地でバラを中心とした植栽デザインを手がけ、横浜イングリッシュガーデン スーパーバイザー、中之条ガーデンズ アドバイザー、山下公園・港の見える丘公園ゼネラル・アドバイザーなどを務め、植栽デザインや庭園の管理指導・監修などを行う。「バラ大図鑑」「バラ講座 剪定と手入れの12か月」など著書多数。片手間で育種も行い、代表品種としては‘チャーリー・ブラウン’（1996年）、‘真夜’（2011年）、‘セント・オブ・ヨコハマ’（2018年）等。

小山内 健（おさない けん）氏

大阪府枚方市にある老舗の園芸会社、京阪園芸株式会社の育種家。バラの栽培、品種の鑑定などに携わる、バラのスペシャリスト。『オールド・ローズ』（講談社、2004年）、『アーリーモダンローズ』（講談社、2006年）、『楽しいバラづくり ローズレッスン 12か月』（別冊 NHK 趣味の園芸、2013年）、『バラ大図鑑：イギリス王立園芸協会が選んだバラ 2000』（主婦と生活社、翻訳監修、2019年）等、著書多数。近年はYouTube 動画にて週一でバラの育て方について配信。代表品種は‘だんじり囃'02’（2002年）、‘トロピカル・シャーベット’（2003年）、‘フィネス’（2017年）、‘アッサンブラージュ’（2018年）‘コント・ドゥ・ラフェール’（2021年）等。

木村卓功（きむら たくのり）氏

埼玉県杉戸町にあるバラ育種・生産・販売会社「バラの家」代表・育種家、ブランド名はロサオリエンティス（東洋のバラ）。代表品種は‘シェエラザード’（2013年、モナコ国際コンクール 芳香賞 FL 部門賞）、‘ニューサ’（2014年、バルセロナ国際コンクール、バガテル国際コンクール グラウンドカバー賞）、‘オデュッセイア’（2013年）、‘シャリマー’（2019年）等。

1. バラを抜かしてヨーロッパの園芸は語れない

園芸とは、屋敷の中庭(園、hortus、garden)での植物栽培をいう。その始まりは、薬草の栽培だったが、修道院や大学に諸々の薬草を集め栽培する薬草園が誕生したため、中庭での薬草栽培は廃れた。薬草に代わって栽培されたのは栽培の簡易さや新鮮さが求められたサラダ用の野菜、それに恒常的に必要とされた香辛料用の薬草だった。しかし、それも市場が発達すると中庭での栽培は限定的となり、代って鑑賞用の花卉や果実の栽培が広がった。

しかし、園芸が発達するヨーロッパでは、鑑賞に向く花卉は、今日とは較べものならない少なさで、色鮮やかな花卉といえばキンセンカ(金盞花、マリーゴールド)、ヒナゲシ、ナデシコなど少数で、それに薬草でもある、ローズマリー、ラヴェンダー、ディル、アリウム、さらにサクランボやプラムなどの果樹が加わる程度だ。

バラもそうしたメニューの一員だったが、後に次第に重要性を増し園芸の首座を占めるようになった。今日、園芸でバラといえばヨーロッパだが、そこで熱狂的に受け入れられる前にバラは小アジアや東地中海地域で単なる植物から、ある種のイメージや用途を有する特定の植物へと昇格した。おそらく、万人を魅了する香りある花、それに触れば怪我もする刺だらけの姿態が多様な植物のなかでも、とくに人々の記憶に鮮明に残ったのだろう。

2. オールド・ローズとモダン・ローズ

バラの仲間、バラ属(Rosa)にはおよそ 140 の野生種がある。世界中に広く分布する種はなく、種ごとに分布する地域は異なるが、南半球のオーストラリアと南アメリカには分布する種はない。ヨーロッパ、小アジア、中国～日本、北アメリカでは多くの種の分布が重なる。

園芸植物の発達には、1)自然界から鑑賞に値する植物を見つけ出すことから始まり、2)栽培中に偶然生じた雑種や奇形などの変わりものを選択し増殖し、流布することで発展し、さらに 3)異なる種や系統間で人工交配を行い、自然界には存在しないまったく新しい植物を生み出すようになった段階が区別される。

バラでいえば、第 3 段階に至って、育種技術が発達したヨーロッパで、小アジアなどから移入した野生種を交配(かけ合わせ)し、自然界にはない人工的なバラ(園芸バラ)を作出する技術が生み出され、数多くの園芸バラが誕生した。

1966 年に全米バラ協会は、第 3 段階の到来を 1867 年とした。この年、最初のハイブリッド・ティー・ローズとされる「ラ・フランス」が登場した。このバラは、コウシンバラ、ローザ・ガリカ、ダマスクバラ、キャベジ・ローズの交配で生まれた株と、コウシンバラとローザ・ギガンテアの交配株であるティー・ローズという、自然界にない人為の交配親から誕生した最初のバラだった。この明治直前の 1867 年以降に作出された新たな交配グループ(個別の栽培品種ではない)は、従来から存在するバラのグループ(オールド・ローズ)に対して、モダン・ローズと呼ばれている。

なかでも、価値のある園芸バラの作出に役立った野生種は、次の8種だった。小アジアのダマスクバラ、ローザ・モスカータ(ムスク[麝香の香り]ローズ)、ローザ・フェティダ、中国のコウシンバラ、ローザ・ギガンティア(大花香水月季)、それに日本のハマナス、テリハノイバラ、ノイバラである。なお、コウシンバラとローザ・ギガンティアの交配に由来するティー・ローズは、モダン・ローズの誕生に重要な役割を果たした。

ノイバラとテリハノバラは、交配親として、**多花からなる花序**という性質を与えた。ローザ・フェティダは**黄色咲き**のバラの誕生に貢献した。樹姿は小型ながら大きな花を開くハマナスは**耐寒性**をバラの栽培品種に加えた。コウシンバラは開花が日長に支配されないため**四季咲き**のバラの誕生に欠かせなかった。ローザ・ギガンティアは**紅茶の香り**のある強い芳香あるバラを生んだだけでなく、花の中央部分(芯)が突出し、花弁の先端部分の縁が裏面に曲がる花型、**剣弁高芯咲き**という花型をもたらした。

思い出のバラについて

旅先で庭園等で目新しい栽培品種に出会い、鑑賞すること、それは私の楽しみのひとつである。しかし、私は自然界に生きるバラにも興味を覚える。バラの野生種は、荒野から草原、林地にまでその育地を拡げ、多様な姿やかたちをとり大地に根付いている。その姿は均整がとれ、どれもが美しい、と思う。

千葉県などで普通に目にできるバラの野生種といえば、筆頭はノイバラであろう。初夏には白色の小ぶりの花を多数配した花序はひと目を惹く。

幕末に、幕府が横須賀に設けた官営工場に医師として来日したサヴァティエ(P. A. L. Savatier)は、医業の傍ら植物採集を行い、それをパリに送った。同地の自然史博物館のフランシェ(A. R. Franchet)が研究し、明治初年に『日本植物集覧』(Enumeratio plantarum in Japonia)にまとめた。テリハノイバラ、モリイバラ、アズマイバラがこの書で記載され、存在が明らかにされた。多様なノイバラの仲間を目の当たりしたサヴァティエの心境はいかばかりであったか。ノイバラはそんな想像を私に想起させもする。

「20世紀以降のバラの育種」

上田善弘

20世紀以降のバラの育種といえば、まさに現代バラの育種です。その幕開けは、19世紀前半、中国から届いたヨーロッパになかった特徴を持つバラとの交配から始まります。その舞台は、フランス、ドイツ、英国を主とし、ヨーロッパ全土で繰り広げられます。その最初の成果が、フランスで育成された‘ラ・フランス’ (La France、1867年) で、ここから現代バラの歴史が始まったとされています。中国のバラの大きな特徴は、春から秋まで咲き続ける四季咲き性です。バラに四季咲き性が導入されることにより、花きとしての利用価値が一挙に高まります。さらには、香りや花色、花形の多様化が進展することになりました。また、日本の野生バラからもたらされたシュートが長くのびるつる性は、バラの観賞方法そのものを大きく変えることになり、庭の景観へ大きな付加価値を加えることになりました。最近では、環境への負荷軽減、省力化を目指した耐病性品種の育成に大きくシフトしてきています。

思い出のバラについて

私の場合、思い出のバラといえば、何とんでも、海外での遺伝資源探索で出逢ったバラになります。中国にたびたび出かけていますので、中国の野生バラや起源の古い栽培バラが該当します。その中でも最も感動的だったのが、チベットに近い中国雲南省麗江地区で出逢ったバラ、ロサ・オドラータ・エルベッセンス (*Rosa ×odorata* var. *erubescens*) です。最初に現地で発見した英国人が、‘リージャン・ロード・クライマー (Lijiang Road Climber)’ の名前で発表してしまったので、この名前の方が有名になってしまったバラです。古い文化を残す麗江地区にだけに植栽されているバラで、おそらく、雲南省自生の野生バラ、ロサ・ギガンテア (*Rosa gigantea*) に何らかの他のバラが交雑した起源の古い栽培バラだと思われます。日本では5月の連休頃、バラの開花としては早い時期に開花し、半八重ピンクでティーの香りのする大輪花が長く伸びるシュートの各節に咲く姿は壮観です。

パネルディスカッション「これからのバラの育種」

1) 千葉県のバラ事情～京成バラ園芸株式会社の歴史と育種～(武内俊介)

千葉県のバラ事情というテーマを任されたが、人をたどるとなかなか千葉に行きつけない。おそらく話題の中心となる人物、鈴木省三の出身地は東京都小石川区、現在でいう東京都文京区辺りであり、当の私は神奈川県出身である。

そこで登場するのが京成バラ園芸株式会社である。その名からも分かる通り、千葉県を拠点とする京成電鉄が主体となり発足させた会社である。私が幼少のころは、私鉄沿線には必ず遊園地とバラ園があり、私が育った場所にもすぐそばに向ヶ丘遊園バラ苑があった。京成バラ園芸株式会社（以降京成バラ園）の創立は昭和34年3月11日（奇しくも東日本大震災の日が創立記念日である）、日本から世界を凌駕するようなバラの品種を作り出そうと夢見た人たちの集まりが設立した会社であり、そのすべてを託されたのが鈴木省三であったと伝えられている。現在の本社のある千葉県八千代市は今でこそ住宅密集地であるが、京成バラ園がこの地にできた頃はほぼ山林であり、当時の画像はまさに開拓団である。

この鈴木省三を有名にしたのは、間違いなく彼が日本を代表する育種家であったという事実であろう。そのDNAは二代目平林浩、そして三代目武内と引き継がれ現在は新しいフェーズに入ろうとしている。時代も、人の考えも大きく変化しており、コンクールで品種を競う意味も希薄となり、そもそも人が育種を行う時代も終焉を迎えるのではないかと思う今日この頃である。

<自己紹介>

神奈川県出身、幼少より植物が好きだったが、アスファルトの割れ目に生えたスズメノカタビラを鉢植えで巨大に育ててみたり、チューリップが好きでも花よりも球根が好きだったりとかなり変わった子供だったらしい。

本格的に園芸と言われるものに接するようになったのは中学二年から。進学した高校の大先輩に鈴木省三氏がおり、ここからズルズルと手繰り寄せられるように京成バラ園に入社することになり育種の道へ。一人前になるのに10年かかると言われたにもかかわらず、入社5年目に鈴木省三、平林浩と、二人の師を失い半出来のまま三代目と言われ、死ぬほどの苦勞を味わう。

‘快拳’

この品種は私のキャリアの中でもローマ国際コンクールで金賞をいただいたということで、メモリアルローズではありますが、耐病性一辺倒の時代に別の切り口で印象に残ったバラであることをご紹介します。

それは耐暑性（耐熱性）、この品種を試作していた時から気になっていたポイントは、夏の暑い日にも葉や花がしおれないことでした。ローマの試作場でも、JRCの試作場でも、涼しい顔で私を待っていてくれたことを覚えています。

2) バラ園で必要とされている品種 (河合伸志)

ブッシュ/シュラブ (自立して仕立てられるバラ)

- ・多花性で繰り返しよく咲き、'アイスバーグ'や'アプリコット・キャンディ'のように3シーズン花の数が変わらない品種が望ましい。
- ・遅咲き品種よりは早咲き品種の方が、年間の開花数が多く望ましい。(平地の場合、色によっては早咲きの方が発色もよくなる)
- ・耐病性は高いに越したことがなく、このことは管理の省力化につながる。
- ・香りはバラの醍醐味の1つなので、あった方がよい。
- ・耐雨性が強いことは大切で、開花期が梅雨に重なりやすい関東以北の地域は特に重要。関東以北の地域では、梅雨入り前に咲く早咲き品種が望ましい。
- ・色や花型などは好みの問題であり、それなりに使える場面があるが、あまりにも個性的な色合いは合わせにくい。
- ・花の大きさは中輪・中大輪もしくは小輪が望ましく、大輪・巨大輪も必要だが、アクセント程度の少量でよい。
- ・'クイーン・エリザベス'のように直立性で樹高が高い品種は、後方にしか使用できず植栽場所に限りが出てしまう。
- ・混植の場合は、イングリッシュ・ローズに多くみられるような柔らかな枝ぶりの方が、他の植物となじみやすい。花の美しさも大切だが、株全体の姿がそれ以上に重要である。(リモンチェッロ'は一輪の花は不細工だが、株全体の姿は理想的)
- ・枝ぶりがある程度密な方がよい。(枝ぶりが粗い品種は複数株を1株のように植え込むことも改善手段の1つ)'パパ・メイアン'のように枝ぶりが荒く、樹高が高く、花数が少なく、花の大きな品種は、どんなに花が美しくても使いにくい。

つる/シュラブ (誘引して仕立てられるバラ)

- ・花付きが良ければ、一季咲きでも問題ない。(四季咲き、返り咲きの品種でも何度も春と同じように咲くわけではないので、咲いても景観としてはあまり役に立たない)
- ・耐病性が高いことは重要。(大きく育つつるバラで耐病性が弱いと、周囲に病気をまき散らしてしまう)
- ・香りもあった方がよい。(ポールズ・ヒマラヤン・ムスク'のように拡散性が高い香りは魅力的)
- ・耐雨性が強いことは大切で、開花期が梅雨に重なりやすい関東以北の地域は特に重要。関東以北の地域では、梅雨入り前に咲く早咲き品種が望ましい。
- ・色や花型などは好みの問題であり、それなりに使える場面がある。(つるバラは基本的に株全体で見るものなので、花型はさほど重要ではない)
- ・花の大きさは中輪・中大輪もしくは小輪が望ましく、大輪・巨大輪があってもよいが、多くの場合中輪や小輪に比べると花数が少ないので、景観を作る上では魅力に欠ける。
- ・枝は細くしなやかな方が扱いやすい。(太く硬い品種は用途が限られる)(つるゴールド・バニー'のように見た目が細くても、張りがあって硬い品種は折れやすく扱いにくい)
- ・枝はトゲが少ない方が誘引作業をしやすい。(ニュー・ドーン'のように大きなトゲが多めの品種は、枝通しが絡まると、外すのに苦労する)(ゼフェリーヌ・ドゥルーアン'のようにトゲが無い品種は、誘引紐がずれやすく、これもまた扱いにくい)(ダブリン・ベイ'のようにトゲトゲの品種は作業性が悪い)
- ・前年枝にまんべんなく花を咲かせることは重要。(ナエマ'のようにステムの数が少ない品種は、つる仕立てに向かない。)

- ・ステムが短い方が、構造物のラインがきれいに表れてよい。(グラハム・トーマス'のようにステムが長い品種は、面を作ることができないが、順調に生育していない場合は、綺麗な面になることもある)
- ・ある程度シュートで枝が更新する品種の方が、年数が経過しても株元が寂しくならない。(つる アイスパーク'や'アルベリック・バルビエ'のようにシュート更新しない品種は、数年後は株元がスカスカになってしまう。)

<自己紹介>

幼少の頃より祖父母や母の影響を受け、植物に慣れ親しむ。自宅が京成バラ園芸の近隣にあったこともあり、子供の頃からバラとの接点が多く、数多くの植物の中の1つとしてバラを栽培。明治大学農学部卒業、千葉大学園芸学部園芸学研究科修了後に大手種苗会社に就職し、草花類の育種に携わる。その後、コンサルタント会社に転職し、2004年に開催された浜名湖花博に携わり、それを機に造園関連の業務も行うようになる。現在はフリーで活動。育種は10代の頃より開始したが、常に片手間の状況で、まともに業務として行ったことがない。最初に作出したバラは、'ウィンド・ソング'(コンパッション×プレイボーイ)。当初は咲きそうな花の花弁をむしることができなかったが、'コンパッション'はつるバラで多数の花を咲かせるためその作業ができた。花粉親の意味はよく分からないが、結果として両親が黒星病耐性に優れるため、'ウィンド・ソング'は中香の四季咲き性で、黒星病耐性に優れ、樹勢が強く、当時のつたない私の栽培技術でも大きな株に生育した。花が好みでないこともあって長年放置していたが、岐阜国際ローズコンテストに出品したところ銀賞を受賞した。現在まで何度か興味の対象の植物をバラのみに限定しようとするものの常に挫折し、その対象はクレマチス、アジサイ、クリビア、リコリス、スイセン、ユリ、宿根草類、斑入り・カラー・リーフ植物、ラン、サクラなど多岐にわたる。なぜだか食虫植物と多肉植物にはあまり興味がない。

'ショコラティエ'

(カプチーノ×フローレンス・デルアットル) ×チャーリー・ブラウン

茶色の丸弁平咲きで、微香。極早咲きで、ゴールデン・ウィーク中に満開になる小型のつるバラで、他に類似した品種がない。前年に伸長した枝の株元から枝先までまんべんなく花を咲かせ、ステムが短いので構造物のラインがくっきりと表れるなどつるバラとしての特性が優れる。枝は細くしなやかで誘引しやすく、アーチやフェンス、オベリスクなど汎用性が高い。春以降も適宜返り咲く。成株では年1~3本のシュートが発生する。樹勢は強いが、耐病性は中程度で薬剤による防除は必要。

3) 家庭園芸で求められているバラ (小山内健)

バラは大輪、大輪こそバラと謳われるほど、昭和から平成初期は、世界中で色鮮やかな大輪咲きが大流行した時代でした。まるで草花を買うかのように持って帰られる、店員に一言二言聞いただけで小さなポットの春苗や秋大苗を買っていかれる、そういう時代だったように思います。園芸雑誌やテレビでの薔薇特集などを見て、または開花シーズンにバラ園に赴き、近くのお店でバラを買うのが主流だったと、あくまで関西での話ですが記憶しています。

今日、この流れは、大きく変わったと感じています。バブル、リーマンショック以降、経済面、環境面が大きく変わり、そしてインターネットが普及、正確な情報を現地に赴かなくても知ることができる。自分の理想とするバラを時間をかけずに検索できる、失敗も減らせるなどが、大きな要因かと思っています。

そうした吟味ができるなかで家庭園芸で求められているバラは、じつに多面的です。おそらく SNS などの利用頻度に関係していると考えられます。

○家庭園芸で求められるバラ

- 綺麗に咲く (花痛みしにくい)
- 長く咲く (繰り返し咲く、花保ちが良い)
- 手間がかからない (病気に強い、伸びすぎない)
- 鉢植えにも向く (まとまり良く咲く、コンパクト、花つきが良い)
- 香りが良い

○今も昔も求められないバラ

- 棘が多いバラ
- 病気にひときわ弱いバラ

<自己紹介>

東京生まれ大阪育ち。学校の帰り道、野に生える植物や野菜、昆虫などを観察することが大好きで、毎日暗くなるまで家に帰ってこない、そんな幼少期を過ごしました。社会人になり、大阪の京阪園芸にバラ担当として入社。自分の人生では見たことがない溢れんばかりの薔薇に毎日感動しきりだったのを覚えています。そんな日々をおくる中、薔薇を交配する担当となり、先代の先生の指導いただきながら、初めてハイブリッドティーの交配をして、その秋に果実を収穫。それを一粒ずつ育苗箱に撒き、発芽してくる薔薇をわくわくして見ていましたが、そんなに甘くはなく、結局その年は自分の思った薔薇は一つも生まれませんでした。思えば、あの経験をしたからこそ、さまざまな方向から見るようになり、今日の自分の育種や薔薇への情熱があるのかと、常々思っています。

‘フィネス’

ダマスク系の香りにスミレやレモンバームなどが溶けこむアロマティックな芳香。細めの枝にも蕾をつけるほど花つきがとてもよく、繰り返し秋までよく咲きます。花形は美しいロゼット咲き。樹勢はふわりとひろがるように生育する木立ち性。樹高1~1.2m。花名は英語の「Fine」に由来するフランス語。ワイン用語での「優雅さ」「繊細さ」「上品さ」などを表す言葉で、ワインカラーに近い花色、芳香、雰囲気から。国営越後丘陵公園香りのバラコンクールで銀賞を受賞。

4) 日本のバラ育種の課題 (木村卓功)

昭和～平成初期のバラ全盛のころ、国内需要だけでバラ会社は満足していた。あえてリスクを冒さなくても、十分な売り上げが見込めた。バラの育種で言えば、少し見た目を変えて発表すれば、それなりの販売数量が確保できた。ただ現在では、その育種方針では厳しい時代だ。自然環境保全意識の高まりと、生活様式の変化で、薬剤を丁寧に散布して育てるバラは一部の熱心な愛好家を除き、選ばれなくなった。

バラの育種では同時に様々な性質が求められる。美しさ、香り、耐病性、四季咲き性、花もち等だ。時に反比例する性質もある。無農薬や低農薬で育てられる耐病性を持つバラを育種するだけでも大変なことだが、現在はバラの美しさと耐病性の両立が当たり前のよう求められる。さらに香り、四季咲き性だ。ドイツのコルデスのバラは、その条件を満たす。

この変化はバラの育種の次元が変わったということ。相当数の分母がなければ、そのようなバラを育種することは困難。会社の規模、体力がものを言う時代となった。バラの育種とは、交配し、新たなバラを世に出すことだけが育種ではない。新しく作り上げたバラを十分に販売する為には広告やメディアの協力、SNSの活用など、多くの資本と努力が必要だ。むしろ後者のほうが難しい。それはバラの育種家として何物でもなかった頃の自分で理解している。そうやって投資資金を回収し、次の育種計画を練り直し、再投資する。

日本のバラ育種の課題は(趣味の場合を除き)、そのように経営としてバラの育種を考えられる人が少ないということ。現在成功しているコルデスなどでは、とうの昔にそのサイクルが完成しているヨーロッパでは当たり前の感覚だろう。

<自己紹介>

現在 48 歳。埼玉県の新井町で、江戸開幕から続く農家の 19 代目。祖父の代は梨、父の代はきゅうりや切りバラを栽培。切りバラへの転換は私が小学 1 年生の時。昔の農家の子供は労働力。「勉強なんかしているなら働け！」というのがよく言われた言葉。子供のころからバラの栽培が日常。個人的には明治の農家の教育を受けて、昭和の働き方をしてきたと思う。専業農家の長男はマイノリティ。バブル景気の浮ついた雰囲気の中、思春期を迎え、なんだか良くわからないまま、年齢を重ねる。それでも、ガーデンローズへの興味があり、モダンローズ等洋書を買ってバラの交配やリネージュを調べたり、育種を行った

19 歳の時に、京成バラ園芸の業者向けツアーで、メイアン、コルデス、タンタウ等視察する。本でしか見たことがなかった権威ある育種家や、その現場を見て、これなら私にも出来ると何故か思った。就農後、ガーデンローズ部門を始める。いくつか良い品種を作れたと思ったが、ガーデンローズ業界に発表する場がなかった。25 歳の時に、現在でも流通している‘わかな’を育種。大手バラ園に提案するも相手にされなかった。バラの育種は「バラを作るだけでは完成しない仕事」だと実感する。35 歳のころ、自ら出店した楽天にて‘わかな’を販売。大好評となる。発表する場を持てたことにより、本格的にバラの育種を開始。今に至る。

‘シャリマー’ 美しいバラの系譜と屈強なバラの系譜の完璧なる融合。淡いピンクに花芯ピンク、個性的な口ゼット咲き、中大輪房咲きの花。ダマスクにティとハーブの中香。ピンクへのグラデーション、艶やかで華やか、表情豊かな花を咲かせるさまは、愛を語らう恋人たちのよう。個人的には今現在、最も美しさと強さを兼ね備えた新しいタイプのバラのひとつ。四季咲き性。名前は「愛のすみか」を意味するサンスクリット語から。